

# ラクロス継続要因に関する研究～男子ラクロスを中心として～

A study of the factor in continuation of lacrosse

～Focusing on men's lacrosse～

1K08B088-7

指導教員 主査 木村和彦 先生

櫻井 亮太

副査 松岡宏高 先生

## 1. 研究目的

ラクロスの競技人口は年々増えていると言われているが、まだまだその数は少なく、認知度も低い。また、大学でラクロスを行なっているが、卒業後は辞めてしまう人が多く見られる。早稲田大学男子ラクロス部も、大学の中で部員数がかかなり多い方で、各学年におよそ20名程度の部員がいるが、卒業してからも社会人クラブチームでラクロスを続けている人は毎年3～4名というのが現状である。そこで、筆者が選手として取り組んでいるラクロスの普及や発展に少しでも寄与したいと考え、本研究に取り組むこととした。特にこの研究は、大学生のラクロス継続動機や大学卒業後のラクロス継続意思、非継続理由などを明らかにすることを目的としている。それらを明らかにすることが競技人口の増加に役立ち、さらに、競技人口の増加がラクロスの普及・発展に繋がると考えたためである。対象については、女子ラクロスよりも競技人口が少なく、メディアへの露出も無い男子ラクロスをメインとして研究を行なった。

## 2. 研究方法

ラクロスの1部から3部リーグに所属している男女合わせて122名の大学生に対して、先行研究を参考にアンケート調査を行った。本研究は男子ラクロスを主として扱っているが、女子ラクロスと比較することで男子の特性がより明確になると考えたため両者にアンケートを実施している。その際、留置法と集合法を用いた。

調査内容は、属性・ラクロスを始めた動機・部活動満足度・部活動参加動機・ラクロス継続意思・ラクロス継続、非継続理由・社会人クラブチームとの関わりについてである。

回収したアンケートは、Microsoft Office Excel 2007によって集計し、PASW Statistics 18で分析をした。分析手法については、カイ二乗検定、t検定、分散分析を用いた。

## 3. 結果・考察

研究を始める以前、大学で1部リーグに所属している者ほど社会人でのラクロス継続意思が高いのではないかと考えていた。しかし、大学ごとの満足度や所属したい社会人リーグにおいては差がみられたものの、部活動参加動機や継続意思については有意差がないことが分かった。また、それは男女を比較しても同じであった。しかし、ラクロスを継続しようと考えている者と、ラクロスを続けたくないと考えている者の間でt検定を行った結果、有意差が見られたものがあつた。それは、社会人クラブチームとの関わりである。最も有意差があつたのが、「クラブチームの人にクラブへの加入を勧められた事がある」で.000である。次から順に、「クラブチームのホームページを見ることがある」で.001、「クラブチームに所属している人と話す機会がある」と「クラブチーム同士の試合を見ることがある」で.002、「クラブチームと試合をすることがある」で.003という結果となった。よって、ラクロスを継続しようと考えている者ほど、社会人クラブチームと関わる機会が多くあることが分かる。

## 4. まとめ

今回の調査では、社会人になってからのラクロス継続意思に所属リーグや性別で差がないことが分かった。しかし、「社会人クラブチームと学生との接点が少ないことが、社会人になってからもラクロスを続けようという意志を阻害してしまっているのではないか」という仮説を裏付けるために作成した社会人クラブチームとの関わりに関する質問では、6つの質問中5つに有意差が見られた。よって、社会人（クラブチーム）が学生に対して積極的にアプローチしていくことで、大学卒業後もラクロスを続けたいと考える者を増やすことができる可能性は十分にあると考える。